

石川県白山自然保護センター普及誌

# はくさん

第19巻 第2号



## ハクサンオミナエシ *Patrinia triroba* (Miq.) Miq. var. *triroba*

秋の七草で知られているオミナエシと同じように、黄色の短い筒状の小花を散房状にたくさんつけて大空に向かって開花します。

分布域は、おもに中部地方以東の日本海側の山地です。県内では、山地帯上部から亜高山帯にかけて、岩崖や岩礫の急斜面に生育しています。白山では、観光新道のほか北縦走路の三方岩岳や妙法山、中宮道のゴマ平付近、三ノ峰などで見られます。和名は、白山に咲くオミナエシの意味です。小花の筒状の部分が別変種キンレイカに比して短く、コキンレイカ（小金鈴花）ともいわれ、この花の姿から名付けられたものです。

# 白峰村のオオショウブキ

— アキタ系フキの南限 —

橋 礼吉

## 夏草刈りの際に残すフキ、ゲボシ、ババユリ

数年前の真夏、白峰村の出作り二軒を調査しました。午前は大道谷堂の森、尾田清正家を訪ねました。屋敷地内、畑の周囲、緩い傾斜地の雑草はきれいに刈られ、仕事のていねいさに驚きました。美しい刈込みの中で残されたものが二つあり、一つはゲボシ（オオバギボウシ）、もう一つはトウブキです。フキには三種類あり、ノラブキ、トウブキ、オオショウブキです。尾田さんに聞いたところ、「ノラブキとは、いわゆるノブキで山菜取りの時とるもの、トウブキとはノラブキよりも二回りも三回り位も大きいもので、先祖が明谷より株分けで移植したのですが、明谷のように生長しない」とのことで、明谷のものは「オオショウブキ」とよんで、桁外れに大きいこと等を教えてもらいました。



巨大なオオショウブキ（白峰村明谷・平四郎山で採取）

午後は、大杉谷・大空の愛宕富士家（現在は廃絶）を訪ねました。富士・とめ老夫妻は夏草刈りの最中でした。ここでも仕事はていねいで一本の草も残らず刈り、ゲボシ、フキは残され、さらに背の高い花茎をつけるババユリ（ウバユリ）も残されていました。愛宕とめさんに「残す理由」を尋ねると「何故かと聞かれると困る。昔から三つを残しているから、三つだけ残している。」との答えが返ってきました。「ゲボシ」に関しては、花が咲くから愛想がよいこと、アクが



トウブキ（出作りの夏草刈りの時、必ず残した）

ないのですぐ湯がいて急な「オカズ」に利用したこと。ババユリは、今はドライフラワーにして冬場の花に利用すること、先祖は悪年に根を掘って救荒食料としていたらしいこと。トウブキについては、明谷の平四郎山より株を移植して育てたこと、今も山菜として食べていること等を教えてもらいました。

二軒の出作りが、夏草刈りで残すギボシ・フキ・ババユリは、一般的には山菜と言われているものです。二軒の出作りの見学からは、出作り地周辺の有用植物は、自然に野放図に育つのではないことが分かりました。それ以上に、トウブキのお里、明谷の平四郎山のオオショウブキについて「大人の背丈もある大きさ」が、実際どれ位なのかに興味を湧いてきました。

## 明谷・平四郎山のオオショウブキの正体

早速、平四郎山を訪ねました。倒壊した出作り住居周辺の杉林やワサビ田の周囲に、巨大なフキが見事に群生していました。一見して素人目にも、「これはアキタ系フキだ」と確信できる程巨大なもので、葉の直径は90センチ、葉柄の長さは1メートル40センチにも達する大きさです。

尾田ふく、愛宕とめ、平四郎山所有者の織田虎次郎<sup>サンカク</sup>三方より教えてもらった、オオショウブキの素性は次のとおりです。まず名称は「奥州フキ」が訛<sup>ナマ</sup>ったもの、織田家には先祖が「秋田より株を持ってきて植えた」との伝承が伝わっています。このフキは、明谷の市兵衛山と、赤谷の山口清次郎家にもあり、いずれも出作り地<sup>ヨシム</sup>で、また市兵衛山は近隣の誼

で、赤谷は婚姻関係で広まったようです。さらに分水嶺を越えて、打波川上流の大野市嵐と石徹白川上流の白鳥町石徹白中居神社の参道脇にあることを突きとめました。嵐では「エドブキ」と言っており、これは蝦夷ブキが訛ったものだと言っています。

明谷のオオショウブキは、他へ株を移植しても条件が良くないと小型化し、尾田・愛宕家を含めて出作り地のトウブキとは、オオショウブキが巨大化できなかったもののように思われます。白峰村の奥州ブキ、大野市の蝦夷ブキの二つは、名称上も、その大きさからアキタ系フキに間違いのないと思います。

## アキタオオブキは二倍体、栽培フキは三倍体

園芸学上は北海道や青森県下に野生化しているものを「アキタフキ」、秋田市仁井田で栽培しているものを「アキタオオブキ」と言って区別します。青葉高氏によれば、仁井田の栽培開始は、江戸時代末の天保の頃（1830～1844）らしく、現在は砂糖漬け等の土産品化に成功し、特産地化しています。秋田より白峰村へ伝播したのは、仁井田の株ではなく野生種のものと思われる。

今津正、藤下典之両氏は、日本各地のフキを綿密に調査し、日本のフキは染色体数が58の二倍体と、三倍体と思われる87の二種があり、栽培フキのすべてが三倍体であることを発見されました。そして三倍体のフキに共通する特色として、早生、強健、葉柄が長く多収穫等をあげています。アキタフキもアキタオオブキも、葉柄は1メートルを優に超える



オオショウブキの刈り取り（白峰村平四郎山・大沢）



オオシヨウブキとオタカラコウの競合（夏草刈りの時、オタカラコウを刈りとりオオシヨウブキを残す）

長さになり、三倍体的な特色をもっているのですが、意外にも染色体数は二倍体であったのです。

ところでフキは雌株と雄株が分かれており、もちろん種子は雌株にだけつきます。そして染色体が三倍体の栽培フキの雌株は、花を咲かせますが発芽できる種子が稔らないという特色をもつので、増やす時は株分けに頼る外はないのです。一方、染色体が二倍体の雌株は、花をつけ発芽できる種子を稔らせます。アキタオオブキは二倍体ですから、花を放置しておくと種子が飛散して発芽するのですが、実際は畑地の親株のように巨大に生長しないのです。そこで栽培農家は、花はフキの苔こけのうちに抜き取らねばならないのです。つまりアキタオオブキは、株分けで増殖しているわけです。

フキの種子は落下傘のような綿毛をつけているので、白山麓のオオシヨウブキは「風的作用で白山麓へ運ばれてきたのではないか」の疑問が起こると思います。アキタオオブキの種子は、風で北日本より白山麓へ運ばれることがあっても、大きくならない性質なのです。「秋田より株を持ってきた」という伝承内容は、園芸学上も事実性がより確かになりました。

## 平四郎山のオオシヨウブキ刈取り

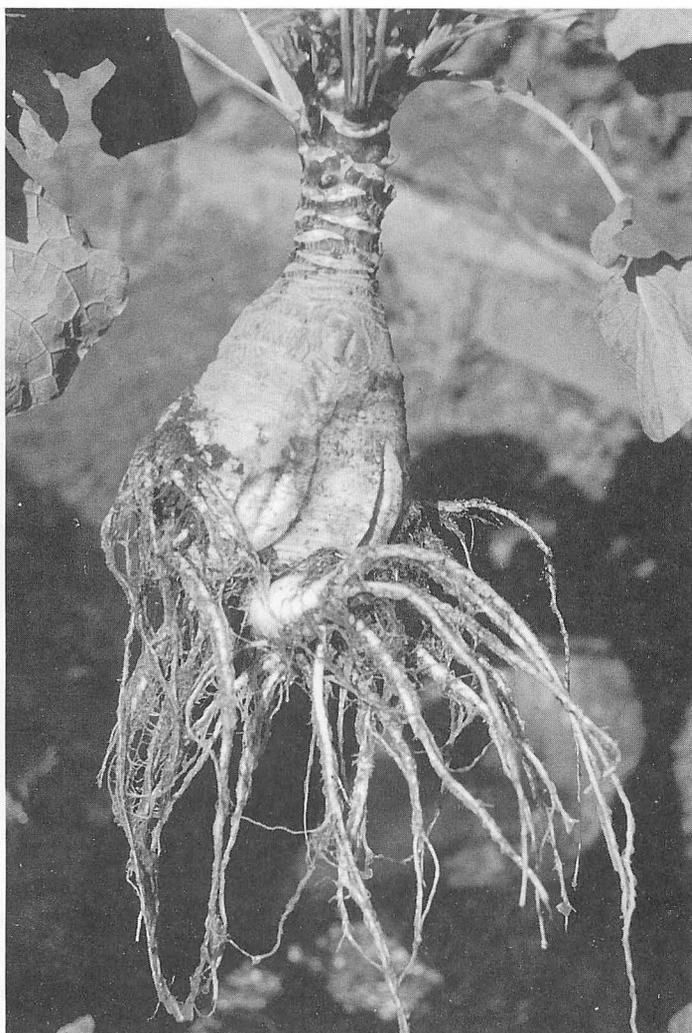
平成2年6月30日、織田虎次郎さんと山本清助さんに同行して、刈取り作業を見聞しました。織田家では何世代にもわたって、日照の少ない陰地、湿気の多い沢、明谷の流れに

沿った湿地に株分けで増やし、群生地を育てたのです。そして出作り最盛期には、年間約80人が刈取りに訪れたとのことでした。

オオショウブキは、有機質土壌中にこぶし程の石が混じる急傾斜地に、4～5メートルの幅で帯状に群生し、それは見事なものです。フキの株は、大小二本に分かれ、最初に芽吹いたものは大きく「一番ブキ」、後から芽吹いたものは小さく「二番ブキ(ナカシン)」と言い、一番ブキを刈取り、来年のことを考え二番ブキは残します。移植後は、自生力任せですが、オタカラコウが周囲に生えて競合するので、夏草刈りの時、取り除くのが唯一の管理的作業です。

収穫後は、湯がいて皮をむき塩漬けにするか、もしくは太陽光で乾燥して、越冬用保存食料にします。料理法は、身欠きニシン、油揚げと共に煮つけて食べます。オオショウブキは、普通のノラブキよりは葉柄の嵩かさが格段に多く、採取・貯蔵の効率が良かったので、焼畑民は干し

うどん、ソーメン等のお礼を出しても、明谷の合流点より約5キロメートルもの平四郎山へ出向いて、屈強な人で25貫(約94キログラム)も背負い運搬したということです。



エドカブラ(スウェーデンカブ)の根  
(白峰村大杉谷大空、愛宕とめ氏栽培のもの)

## 巨大なオオショウブキについて考える

平四郎山のオオショウブキは、湿地を選び株分けで広めること、刈取りの際は種の保存を考えて二番ブキを残すこと、夏草刈りの時、周囲の草を刈ること等は、普通の山菜とは違った接し方をしています。各出作りのトウブキも、夏草刈りの時は残して保護しています。トウブキ・オオショウブキは、手数のあまりかけない管理で、これは農耕の“出発点、や“始まり、を思わせるような所作と言えましょう。佐々木高明氏は、人間がある種の保護や管理を加えて利用する野生植物とのかかわり方を、採集と栽培の中間、すなわち「半栽培」と名付けるよう提唱されていますがオオショウブキは、半栽培の該当例と思われま

す。

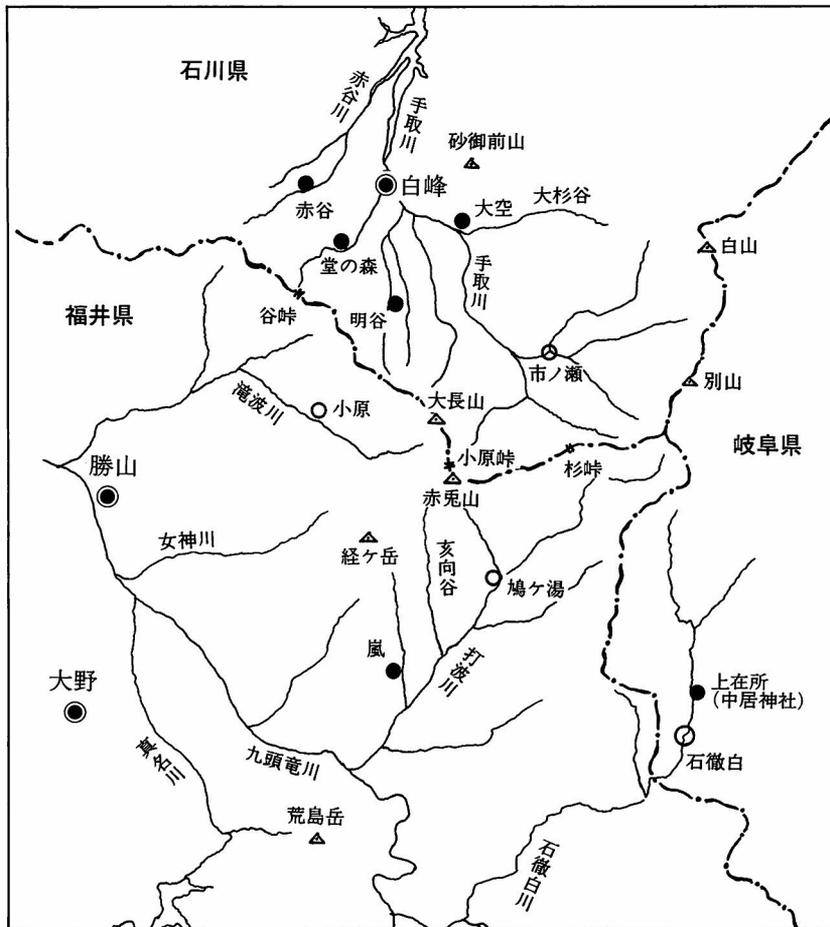
白峰村には、「エドカブラ（蝦夷カブラが訛<sup>マ</sup>ったもの）」というスウェーデンカブを作っています。現在このカブの栽培地は、北海道日高地方、北上山地北部と白峰村で、北方系の珍しい野菜です。アキタフキの野生地は、北海道各地と青森県下半島や十和田湖畔です。アキタオオブキの栽培地は、秋田市とさらに非常に遠い距離をおいた白山麓です。このアキタ系フキのひろがり、さきに紹介したスウェーデンカブと同じ分布傾向をしており、偶然の一致とは思われません。

白峰村には、「クワジマスギ」という耐雪性、耐寒性に優れる在来種のスギがあります。このクワジマスギのルーツに関して、室町時代より江戸時代初期にかけて白山麓を支配した土豪加藤藤兵衛が、「秋田より杉種一石を取寄せ、白山麓十二ヶ村に分け、植林したのが創まりである。」との伝承があります。

白山麓には、珍しい野菜・スウェーデンカブの南限がある他、巨大なアキタオオブキの南限もあり、クワジマスギのルーツは秋田であるとの伝承がある等、北海道、東北地方等と関係の深い北方系の農作物、樹木が幾つかあるのです。

白山麓の高山植物分布の特色として、「日本における分布西限が多くあり貴重である。」との視点があり、保護策がとられています。農作物にも同じことが言えるのです。白峰村のスウェーデンカブ（エドカブラ）、オオショウブキ（アキタオオブキ）が、後世にいつまでも伝えられていきますよう努力したいと思います。

<加能民俗の会>



オオショウブキ・エドブキ分布概観図

# ニュウナイスズメの繁殖

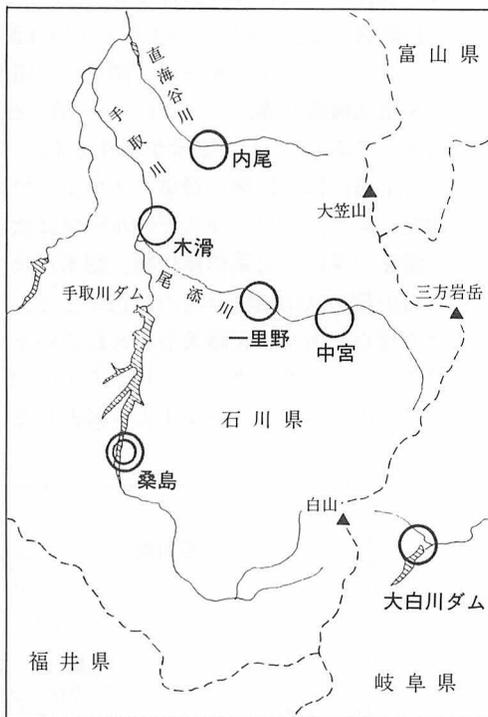
— 県内初認記録 —

上馬康生

皆さん、ニュウナイスズメという鳥を知っていますか。普通のスズメより若干小さく、スズメと異なり雌雄で体の色が違います。雄は頭から背がスズメより赤っぽい褐色で、白っぽい下面とのコントラストのきれいな鳥です。雌は草色を帯びた褐色で、目の上に淡色の眉斑（まゆ毛のように見える線）が目立ち、まるで別種のようにです。声はスズメに似たチュンとかチュツのほか、よくとおる声でチーチーチーと連続的にさえずります。

全国的には、本州中部以北の山地の林や北海道の林で繁殖し、秋から冬には関東以西の温暖な地方の農耕地や川原に群れで見られますが、スズメのように多い鳥ではありません。繁殖の確認されているところは、北海道では内陸部だけでなく海岸沿いの平野部にもあり比較的一般的ですが、本州では積雪の多い地方のごく一部に限られています。石川県では、今まで春秋に観察例が少数あり旅鳥と考えられていました。

そのニュウナイスズメが、今年白山麓で繁殖



白山麓で記録されたニュウナイスズメの確認地点



単材を運ぶニュウナイスズメの雌  
(1991. 6. 4 白峰村桑島)

しているのが確認されました。5月の初め、白峰村桑島の白峰物産館に勤められる山口一男さんから電話があり、スズメといっしょに餌を食べにくるきれいなスズメがいるがニュウナイスズメではないかとのことでした。5月9日に訪ねてみると、物産館の2階ベランダに餌のヒエがまかれており、まもなくスズメ1羽が飛来し食べ始めました。そして次にきたのがニュウナイスズメの雌でした。やがてスズメは3羽となり、ニュウナイスズメは一度スズメから追われましたが、しばらくいっしょにヒエをついばんでいました。そして観察していた1時間半の間に雄も1羽で2度現れました。いずれもスズメの群れの中に舞い降りていっしょに餌を食べていました。一度雄は飛び



県内で初めて確認されたニュウナイズメの営巣環境  
—右端の道路標識で営巣—

立ってから近くの電柱のてっぺんに止まり、4～5分間さえずっていました。山口さんの話では、ニュウナイズメが来るようになったのは4月中旬からとのことでした。それで、これは単に渡りの途中に立ち寄っただけではなく、近くで営巣している可能性が高いと考え、山口さんに幼鳥が現れないかなど、その後の様子を見てもらうことにしました。そして6月3日、巣の発見の知らせが入りました。

巣は白峰物産館の横の道路にある道路標識の鉄製の支柱の中でした。道路標識は手取湖（手取川ダム湖）に面した道路の側壁に立てられており、道路からの高さは3

m 50 cmで、写真のように途中で折れ曲がっており、最上部に直径7 cmの穴が開いていました。4日に見に行くと、近くの電線に雛2羽と雌が止まっており、また別に雄も1羽見られました。そして雌が、その穴に枯草を続けて何度か運び込むのも観察しました。ニュウナイズメは、本来は樹洞やキツツキの穴に営巣しますが、人家や巣箱の利用も知られています。しかしこのような場所に営巣しているとは思ってもみませんでした。

白山周辺では、今まで岐阜県側の白川村大白川ダム付近での繁殖の記録があり、これが全国で最も西の端の記録でしたが、今回の発見で繁殖確認地の分布がさらに西方に広がったこととなります。表に示したように、本年は白山の石川県側の別の2つの場所でも5～6月に雌雄で見つかりました。また昨年も家族と考えられる群が7月に観察されています。そして1984年と1987年にも5月の記録があることから、以前から少数が繁殖していた可能性があります。白山の岐阜県側の鳥類について詳しい白鳥町の田代憲次さんによると、1974年以来繁殖期と考えられる時期に、巣の見つかった大白川ダム付近の他にも白川村や白鳥町の数か所で姿が観察されています。昔からのことか近年になってからのことかは分かりませんが、白山周辺の山麓部（山間部）が、ニュウナイズメの繁殖にふさわしい環境のようです。今後ちがう場所でも巣が見つかると思われれます。最後になりましたが、情報をいただいた皆さんありがとうございました。

（白山自然保護センター）

#### 石川県内白山地域におけるニュウナイズメの観察例

番号	年月日	場所	個体数（性別等）	主要行動	観察者
1	1984. 5. 2	吉野谷村木滑	3（雄2・雌1）	さえずり	上馬康生
2	1984. 5. 3	"	1（雄1）	さえずり	上馬康生
3	1987. 6. 3	"	2（雄1・雌1）	採餌	上馬康生
4	1990. 7. 10	尾口村一里野	4（雄1・雌1・幼鳥2）	採餌、同一行動	橘 映州
5	1991. 4.	白峰村桑島	（雄・雌、別々に）	採餌	山口一男
6	1991. 5. 9	"	2（雄1・雌1、別々に）	採餌、さえずり	上馬康生
7	1991. 5. 19	河内村内尾	2（雄1・雌1）	つがい行動	竹田伸一
8	1991. 5. 26	"	4（雄3・雌1）	巣材運び	中村正博、他
9	1991. 6.	白峰村桑島	（雌2）		山口一男
10	1991. 6. 4	"	4（雄1・雌1・幼鳥2）	巣材運び	上馬康生、山口一男
11	1991. 6. 5	吉野谷村中宮	1（雄1）	さえずり	林 哲
12	1991. 6. 8	"	1（雌1）		林 哲

白峰村桑島の例は主なもののみ

# スミソニアン自然史博物館の教育活動

— 海外研修レポート —

東野外志男



スミソニアン自然史博物館

アメリカ合衆国は歴史の新しいわりには、博物館や美術館の多いところといわれています。ちょっとした街でも、小さな博物館などがあるといいます。数だけではなく、世界的に有名なものも多いようです。自然史系の博物館については、首都ワシントンにあるスミソニアン自然史博物館やニューヨーク市のアメリカ自然史博物館、シカゴのフィールド自然史博物館が世界的にも有名です。

博物館というと、何か変わったものが展示してあるところというのが、一般の方が博物館に対して抱く印象でしょう。博物館には普段みることができない珍しいものや貴重なものを展示してあるのも事実ですが、他にも一般の来館者や、幼稚園や小中学校の園児・児童を対象に、いろいろな普及活動を行なっています。このことは、一般にはあまり知られていないようです。

筆者は、この春の3月から5月までのほぼ3ヶ月間、スミソニアン自然史博物館に滞在しました。その際に、この博物館が行なっている教育活動の一端をみる機会を得たので、ここで少し紹介いたします。

## スミソニアンとは

スミソニアンという言葉は、博物館や美術館に興味のある方なら一度は耳にした言葉だと思います。正式にはスミソニアン研究所(Smithsonian Institution)というべきでしょうが、一般にはスミソニアンという名で親しまれています。人類の知識の集積・向上とそれを広く世に伝えることを目的とした研究・教育センターで、現在 14 の博物館・美術館、動物園、6 つの研究所を有しています。いずれも世界的にも有名な施設ですが、なかでも国立航空宇宙博物館(National Air and Space Museum)、国立自然史博物館(National Museum of Natural History)、国立米国情史博物館(National Museum of American History)、国立美術館(National Gallery of Art)が、一般にはよく知られているようです。スミソニアン研究所は英国の科学者ジェームズ・スミスソン(James Smithson)が合衆国に遺贈した基金により 1846 年に設立されたもので、スミソニアンという名はこの設立者の名からきています。スミソニアン研究所の博物館のほとんどが、ワシントンの通称“モール”と呼ばれている広大な緑地にあります。

## スミソニアン自然史博物館

スミソニアン自然史博物館(正式には、スミソニアン国立自然史博物館というべきですが、ここでは略してスミソニアン自然史博物館とします。)は、スミソニアン研究所の中でも設立は古く、現在の位置に建物が建設されたのは 1910 年です。日本で自然史博物館といった場合、生物学と地質学の分野を扱うのが普通ですが、アメリカでは一般に人類学の分野も扱っています。このことは、ニューヨークのアメリカ自然史博物館やシカゴのフィールド自然史博物館でも同様です。そのため、スミソニアン研究所の自然史博物館は、国立自然史博物館/国立人類学博物館(National Museum of Natural History/National Museum of Man)と表記されることもあるようです。

自然史・人類学に関する資料収集・研究はスミソニアン研究所の設立(1846年)当初から進められ、現在1億1,800万点以上の動物、植物、岩石、鉱物、化石、及び文明遺品等の資料を有するといわれています。この数は世界有数を誇ると思われれます。この博物館の一般来館者の数は年間約七百万人で、1日に2万人もの人がここを訪れていることになります。この数は、スミソニアン研究所の施設の中では国立航空宇宙博物館につぐものです。

## ガイド付き博物館ツアー

この博物館の展示はその優れた資料を中心にして行なわれています。スミソニアン研究所の他の博物館と同様に、展示物は豊富で展示コーナーも膨大な数になります。それら

べてを1日や2日でとうてい見られるものではありません。1~2時間で概要を知りたい、もしくは、展示についてもう少し詳しく知りたい人などに助けになるのが、このガイド付き博物館ツアーです。これは博物館の中のいくつかの展示を解説してくれるというものです。夏休みを除いた時期(9月から翌年の6月にかけて)、毎日2回、午前10時30分と午後1時30分から定期的に行なわれています。博物館の中央の大広間に定刻に集まる



ドーセントが博物館ツアーを行なっているところ

と、ドーセント(Docent)がいて、来館者を展示室に案内してくれます。

ドーセントとは、博物館などで展示室の案内や、後述する「ディスカバリー・ルーム」や「春のクラスルーム・プログラム」などで生徒・児童や一般の方を指導する方のことです。スミソニアン自然史博物館では、ボランティアの方がドーセントの役を担っています。

このツアーでは展示物のほんの一部が案内されるわけですが、ドーセントの好きどころや得意としているところを案内しているようです。この博物館では、展示については毎年のように古い箇所を更新していますが、それでも現在の学問からみて内容がかなり古くなったりしているところもいくつかあり(例えば、化石の復元)、それらについてはその説明があり、新しい成果を述べていました。時間は1時間30分前後で、筆者が参加したツアーでは、10~20人の人が参加していました。

このようなツアーはその回数は別として、スミソニアン研究所の博物館だけではなく、アメリカ合衆国の国内では一般の旅行者が訪れる施設でほとんど行なわれているようです。このような会では、参加者からいろいろ質問がでるのが普通で、また、ドーセントはその質問に誇りをもって答えているのが印象的でした。

## 伝統芸術の実演

これは、アメリカ合衆国や世界各地の伝統芸術を実演し、その製作過程を来館者にじかにみてもらおうというものです。これらは定期的で開催というものではありませんが、毎月、異なったテーマのものが行なわれていました。筆者が滞在している間に、7つのテーマのものが行なわれていました。2、3あげますと、「アメリカ原住民の人形作り」・「日本の木版画」・「タイの果物・野菜の彫刻」などで、講師は外部の方でした。

「アメリカ原住民の  
人形作り」では、講師  
であるインディアン人  
形の製作者のスタジオ  
をそのままの形で展示  
室の一角にセットし、  
インディアンの人形製  
作の実演を行なってい  
ました。「日本の木版  
画」と「タイの果物・  
野菜の彫刻」では、展  
示室の通路の一角に製  
作場所が設けられ、そ  
の製作過程も含めて、  
実際の作業が行われて  
ました。このような実  
演は、ケースにはいっ



アメリカ原住民の人形作り

た展示物とは異なり、来館者には人気があったようです。「果物・野菜の彫刻」は、知らない方が多いと思いますが、タイの婦人達が昔から行なっているもので、西瓜・大根・バナナ等様々な果物・野菜を彫刻して花のようなものを作るものです。重要な祭典や儀式、祝典などの際に装飾として用いられるということで、果物や野菜の生の色が実にうまくいかされていました。

## ディスカバリー・ルーム

ディスカバリー(discovery)とは発見という意味で、ディスカバリー・ルームをそのまま訳すと発見部屋となります。この部屋では展示室と異なり、博物館の収集物の一部を実際に手にふれることができます。そのことにより、来館者の自然に対する興味や学習意欲を刺激して、自然の再発見をしてもらうというわけです。ディスカバリーという名も、そういうところからきているのでしょう。

この部屋は展示室の一角に設けられ、部屋のあちこちにおいてある収集物は自由に手にふれたり臭いをかいだりすることが可能になっています。それらの資料の多くは、1つ1つに簡単な質問状がつけてあります。たとえば、アンモナイトの化石に対して、「これはなんですか」、ビーバが食いちぎった木に対して、「これはどうしてできたのですか」、というふうな質問です。質問を書いた紙の裏には、その答えが書いてあり、自分で学べるようになっています。また、教材ボックスというものもあります。1つのテーマごとにまとめてあり(例:山の火(Fire of Mountain:火山の岩石がはいっている))、ボックスの中には、その展示物についての質問と答えを付したカード(約10枚程度)がはいっています。

この部屋はかなり人気があり、1年間の利用者数は約100,000人ということです。特に、幼稚園児や小学校低学年の団体利用が多いということです。ここでもドーセントが利用者の指導を行なっていますが、ここでの利用は、利用者の自主性にまかせており、ドーセントは利用者から質問があれば答えるという形を主にとっていました。

博物館の館内で一般来館者に自然物を触れさせるということは、一般的になってきているようで、内容こそ異なっていますが、フィラデルフィアの自然史博物館やシカゴのフィールド自然史博物館で、同じような部屋が設けられているのをみました。



ディスカバリー・ルーム

## 春のクラスルーム・プログラム

以上述べてきたものはおもに一般の来館者を対象としたものですが、他に特に幼稚園や小中学校の児童や生徒を対象としたプログラムが用意されていました。対象の園児や児童



春のクラスルーム・プログラム(大昔のワシントンのインディアン)

達の年齢にあわせて多数のプログラムが用意されており、5月中旬から9月にかけて(12月下旬から1月上旬を除く)、土・日曜日を除いて毎日のように教育プログラムが行なわれています。そのために、展示室から離れたところに部屋が教室用意されていました。

筆者が滞在していた時期に行なわれていたのが、春のクラスルーム・プログラムです。このプログラムは主に小学生を対象とするもので、学校が野外活動の一環として参加するものです。テーマは、「日本の子供達—学校と遊び」・「アフリカの織物」・「大昔のワシントンのインディアン」・「岩石と鉱物の鑑定」・「イロコワ族インディアンのガバメント」で、内容は様々です。クラスによって講義の進め方は異なりましたが、

全体に共通していることは、生徒への問いかけが基本になっていることと、それぞれのテーマに関する実際のもの(例えば、「日本の子供達—学校と遊び—」では日本の子供達の遊び道具、「岩石と鉱物の鑑定」では鉱物や岩石の実物など)をみせると共に、それらに実際に手にふれさせ、体験させるということでした。指導は2~4人のドーセントによって行なわれ、問いかけに対する生徒の反応も活発でした。小学生を対象にするとはいえ、内容は低くなく、例えば、「岩石と鉱物の鑑定」のクラスでは、岩石のでき方についてプレート・テクトニクスの



春のクラスルーム・プログラム (日本の子供達 —学校と遊び—)

考えも一部入れていました。「学校と遊びでの日本の子供達」では、ビデオと実物の日本の玩具などが教材になり、話が進められ、内容も正しくなされていました。

ドーセントのなかにはそれぞれの分野にかなりの知識を有している人もいるようで、知識の取得にはかなり熱心です。「岩石と鉱物の鑑定」のクラスを担当していたドーセントは自分で地質に関する教育コンサルタントをしており、来年日本の京都で開催される“万国地質学会”に出席する予定であると話していました。アフリカや日本を紹介していたドーセントは大体一度はその国で、期間の長さは別として暮らした経験のある人達でした。

スミソニアン自然史博物館でみるのができた普及活動の一端を、ここで簡単に紹介しました。ここで紹介した活動の1つ1つが特に素晴らしいというものではありませんが、博物館は単に珍しい展示物を見るためだけのところではないということが、おわかりかと思います。このような活動は、博物館の目的や規模、それぞれの館が有している事情によってもかなり異なるでしょうが、博物館は展示以外にもこのような活動を行なうところです。そのことを、一般の方々は知っておくべきことですし、また、博物館に対しそのような活動が行なわれることを期待してゆくべきことだと思います。

(白山自然保護センター)

## たより

**農耕の起源を示唆する植物**：日本の文化は稲作に強く影響されて形成されてきた文化であることはよく知られていますが、稲作が始まる以前の作物栽培様式—半栽培—も又、日本文化の深層を示唆する農耕法とすることができます。本誌で紹介した「オオシヨウブキ」も橘氏が指摘されているように半栽培作物と同様に「稲作以前」の「栽培植物」として貴重な植物であると思われます。この植物が白山麓でどのように分布していたか今後の研究に期待したいと思います。

**自然史博物館**：欧米の主要都市には例外なく自然史系の博物館がみられます。その設置場所もほとんどが市民の憩いの場所として整備された公園の中にあり、市民が気軽に博物館を利用できるようになっています。欧米諸国では、自然と文化は表裏一体の関係にあることがよく理解されており、その地域（郷土）の自然理解がかなり高度に進んでいます。

欧米では、博物館の設立が都市計画時に予め、その中心施設として位置づけられているため、日本の各地にみられる博物館とは著しい違いがあります（日本では若干の例を除いて都市の中心地にはありません）。これから設立される博物館は、もっと市民と直結できる場所につくりたいものです。東野氏の研修が博物館活動や研究普及に生かされるものと思いますのでご期待下さい。

**白山麓の鳥類相**：今回の上馬氏のニューナイスズメの公表によって県内での鳥類の繁殖種は1種付加され116種（石川の動植物（1990）では115種記載）となります。ニューナイスズメがどのような理由（本種の社会的、生態的な理由）で白山麓の各地で分布を広げていくかは今後の課題です。白山麓では、従来は「都市鳥」の代表的な1種として知られるムクドリが、近年あちこちに繁殖するようになってきている反面、スズメとツバメが手取川支流の村落では減少している傾向があります。森に囲まれ、手取川の流域に展開する白山麓の集落一帯での鳥類の生息実態は、まだ不明なことが多々あります。白山地域の自然史の解明のため、手取川流域の村落に生息する鳥類について現在予備調査を始めておりますのでご期待ください。（林哲）

## 目 次

表紙	ハクサンオミナエシ	米山 競一	1
白峰村のオオシヨウブキ	— アキタ系フキの南限 —	橘 礼吉	2
ニューナイスズメの繁殖	— 県内初認記録 —	上馬 康生	8
スミソニアン自然史博物館の教育活動			
	— 海外研修レポート —	東野外志男	10
たより			16